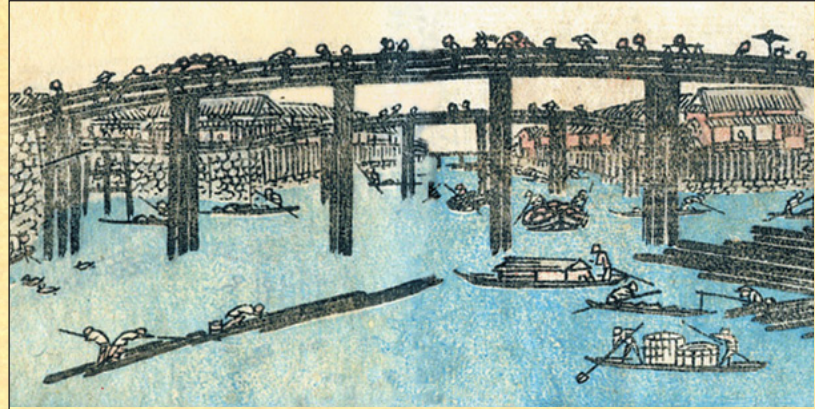


汚さなければきれい

エッセイ 大江戸エコ口帖
◆第五回◆

文／石川英輔



四ツ橋の下に船を出して、大きな水桶に水を汲み入れている。
水使用量の多い大店の人のだろうか。「浪華の賑ひ」より

人が暮らすには水が必要だ。いつの世も人口の多い都市では、大量の上水、つまり飲み水が安定供給できることが絶対に必要なことになりはしない。

江戸時代の日本ではどうだったかというと、三都、つまり京都、江戸、大阪の三大都市のうち、京都のある山城盆地は周囲が緑豊かな山のため、井戸を掘るだけで上質の水が充分に得られた。

ところが江戸は、面積が広ばかりか市街地が埋め立て地だったため上質の地下水が得られず、神田川、多摩川を水源とした神田上水、玉川上水という人工の上水道を設けた。自然流下式といって、地下に埋設した木製の水道管に水を流し、地上からつるべで汲み上げる方式だったが、当時としては給水人口・面積とも世界最大の水道網だった。

大阪も海岸の都市なので上質の地下水が得にくい点は同じだったが、上水道のなかった点がまことにユニークだった。大阪出身の喜多川守貞という人が幕末期の三都の様子を書き残した『守貞謄稿』という絵入りの記録は各地の上水の事情にもくわしいが、その中で大阪の水について面白い記述がある。現代語で要約すれば、「大阪の民家の台所には水がめが二つあり、一方には川の水、一方には井

戸水を入れてある。川の水の方には蓋があり、井戸水にはないが、井戸水は洗い物などの雑用水だからだ。川の水は毎朝汲んできて、飲用にする」というのだ。

日本の商工業の中心地だった大阪は、人口約40万人と江戸に次ぐ大都市だったが、「江戸の八百八町」に対して「浪華の八百八橋」というほど橋が多かった。橋が多かった理由はいうまでもなく川が多かったからだ。大阪では、大量の商品を運ぶのに必要な水路・堀割などが発達していたのだ。現代ではその大部分が埋め立てられているが、江戸時代の地図を見るとまさに「水の都」というのにふさわしいほど川が多い。

そして、大阪の人々は目の前の川の水を上水として使っていた。山村ならともかく、大都市の中を流れる川や水路、堀割などの水が飲めたというのは驚きだが、実際、江戸時代の大阪市中の川を描いた絵をよく見ると、到るところで人々が水を汲んでいる。

汚してから浄化するハイテクではなく、「汚さなければきれい」という当たり前のことを当たり前にやる超ローテクによって、先祖はエコ生活をしていたのである。

いしかわえいすけ
作家、著書に「江戸時代の資源やエネルギーの循環について紹介した『大江戸リサイクル事情』『大江戸えねるぎ事情』などがある。

古Tシャツでパッチワーク

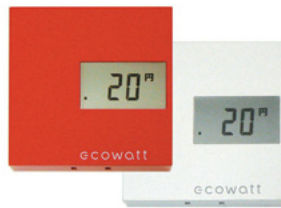


kurkku design (電話03-5414-6998) <http://shop.kurkku.jp>

タンスの中を開けてみると、もう着ないんだけど、捨てられない……そんなTシャツが眠っていませんか？ でも、そのままにしておくのはもったいない！ エコシヨップとしてお馴染みのクルックでは、着古したTシャツを回収する「リボンプロジェクト」を展開。そこで集まったTシャツから、かわいらしいクッションカバーが誕生しました。いろんな生地を持ち寄って、パッチワークにしているのも高ポイント。

余分な電力が一目瞭然！

電子レンジや炊飯器など、毎日何気なく使っている電化製品。その電気代やCO₂排出量は、コンセント型の「エコワット」を使えば、ひと目で分かります。計り方はいたって簡単。対象となる家電のプラグをエコワットに差し込み、それをコンセントにつなげばOK。意外な待機電力を目の当たりにすれば、コンセントを差しっぱなし！なんて事態もなくなるはず。エコはもちろん、家計の節約にもつながるアイテムです。



エネゲート (電話06-6458-7936) <http://www.enegate.co.jp>

エコモノたちで、
あなたの暮らしを
彩りあるものにしてみませんか。

ラベルも残さずリサイクル



いちごとみかんの形をした、ちよつぱり大ぶりのコースター。実はこれ、缶詰についていたラベルと、フェルトを混ぜて作られたものなのです。よく見ると、ところどころにラベルの断片が！ そんな面白いある作品を作っているのはアーティストのTomosukeさん。ラベルだけでなく、たとえば輪ゴムなど、身近にある素材を新たなものへと再構築するのが得意なのだそう。コースターはほかに、赤と青のりんごの形もあります。

バーデンバーデン (電話03-5722-3779) <http://www.badenbaden.jp>